

自撮りヒューマンドキュメンタリ

山岡和純：第2部：行政官から教育・研究者へ

地方自治の現場でー山口県農林部 1999-2001

農水省の農業土木技官は、本省課長補佐の激務を1~2場所2~3年間耐えて、次の任地でリハビリするのが通例です。私はこれを異例の3場所5年間勤め上げ、1999年(平成11年)4月、30代の最後に山口県庁に転出し、農林部農村整備課長として着任します。ここは農業土木技官にとって花形ポストの一つです。結局私は、入省同期生ほぼ全員が経験した地方の現場事業所の工事課長職を飛び級して、一つ上の登竜門である都道府県の課長ポストに一番乗りしたのです。直接の部下となる課の職員は30名前後でしたが、農村整備課は山口県の土地改良事業を一手に



束ねています。直接の部下に加え、県内の出先機関の200名を超える土地改良事業関係職員と組織を事実上指揮監督するという、管理職の立場を初めて経験しました。

ここでは、語り尽くせば紙面が何ページあっても足りないほど、様々な出来事がありました。県の幹部職員としての県議会への対応、あるいは県OBの元職員との数々の交流のエピソードも忘れられません。農林水産省の本省や事業所在籍時には知りえなかった、地方自治体組織とそれを取り巻く地元農家等関係者の生の姿を目に焼き付けた2年間でした。肩書のうえで地方公務員となった私は、17年間の国家公務員生活では気付かなかったとても重要な知見を得ます。それは、「農業土木技術者とは何ぞや」との問いかけへの答えです。

地方公務員でなければ味わうことができない、受益者である農家の人々、地元住民、彼らが組織する利益団体との距離の近さが、それを教えてくれました。後に東京大学で教鞭を執る身となったときに、私が学生たちに必ず言った言葉は、「君たちの多くは将来、農業土木技術者というエンジニアになる。その仕事は、まさに地域の臨床医というべきものである」というものです。臨床医は、一人の人間である患者から症状を聞き取り、必要な検査をして病気の原因を突き止め、その患者に適した治療プランを示し、患者との合意のもとで処方箋を作成し、患者自身による治療を促します。病気を治すのは医者ではなく患者自身です。医者は患者が適切に病気を治していけるように専門知識と経験を動員する専門家なのです。

この文章の「一人の人間である患者」を「多くの人々が生業を営む地域」に読み替えれば、エンジニアも医者と同じなのです。つまり、何か問題が未解決の地域があった時に、関係者から経緯と現状を聞き取り、必要な現地調査をして問題の原因を突き止め、その地域に適した解決策を示し、そのために必要な事業計画を地域の合意を得て策定し、(国庫補助金の申請など)地域による事業の実施を促すのです。優れた技術を持つ医者が社会に必要なと同様に、高度な専門知識と経験を駆使してこの一連の作業を円滑に実施できるエンジニアが社会には必要であり、その卵を育てるために大学で専門教育を行っているのです。

山口県に農村整備課の前身の耕地課が設置されてからちょうど70周年を迎えました。これ

を記念するイベントを企画する際に、私は一過性のイベントだけでなく、形に残るものとして、70年間の歩みを綴る写真集「田園維新」の出版を提案します。県OBの元職員の皆さんの全面的なご協力を頂いて、立派な写真集ができあがりました。維新と言えば、山口県に赴任したお陰で、幕末の維新の志士たち、とりわけ松下村塾の吉田松陰先生とそのお弟子たち、就中高杉晋作について新たに多くのことを知り、知れば知るほど彼らの生き様に心酔していく自分がそこにいました。私生活面では家族、とりわけ娘たちは、東京では味わうことのできない、自然豊かで人情味溢れる地方都市での生活を満喫したことと思います。トラフグのてっさ、てっちりの美味しさに家族全員がはまり、2年間で一生分を食べ尽くしました。順風満帆の夢のような山口県での生活でしたが、好事魔多し、落とし穴が待っていたのです。

世界水フォーラム－(財)日本農業土木総合研究所 (JIID) 2001-2003

どんな落とし穴であったか、思い当たる節はありますが確証はないので、具体的な説明は伏せさせていただきます。山口県への転籍出向の期限は定められていませんでしたが、慣例によれば3年間のはずでした。しかし、在籍2年間で、突然2001年4月に、東京へ戻されます。港区虎ノ門にオフィスを構える、(財)日本農業土木総合研究所 (JIID: The Japanese Institute of Irrigation and Drainage) への転籍出向を命じられ、調査研究第二部長を拝命します。今から思えば、農水省は大変心を砕いて配慮してくれたのだと思います。この団体の部長ポストへの出向も技官の登竜門の一つであり、しかも諸先輩のこれまでの慣例より1年早い当該ポストへの着任でした。ですから、見た目にはあからさまな左遷ではなく、順調な出世のようにも見える転籍です。しかし、もうこの時は既に、私が行政官に戻る道は閉ざされていたものと思われまます。そのことは次回の転籍ではっきりとします。

ここでもまた、参考にするべき前例のない特命が待っていました。それは2年後の2003年3月に京都・滋賀・大阪で開催される「第3回世界水フォーラム (WWF3: The 3rd World Water Forum)」への対応でした。世界水会議 (WWC: World Water Council) が主催する世界水フォーラムは、1997年にモロッコのマラケシュで第1回、2000年にオランダのハーグで第2回が開催され、当時2001年1月の中央省庁再編で国土交通省となった旧建設省の河川局技官のグループが政治力を巧みに使い、当時の皇太子殿下を旗頭に戴いて強力で誘致活動を展開し、第3回を同グループのリーダーの出身地である関西圏で開催する運びとなったものです。

国土交通省の積極的な動きに対して、農水省は完全に出遅れていました。河川局のトップでもある本件の中心人物は、流暢なフランス語と英語を操る国際派で、国際機関への出向経験もあり、国際社会の動きと力学を熟知していました。国内の政治行政の力学だけを飯の種にしていた農業土木技官の上層部は、長年のライバルである河川局に、国際分野では思いっきり出し抜かれてしまったのです。水と言えば、世界を見渡しても、日本の国内でも、河川や湖沼などの水資源の利用量が圧倒的に一番多いのは農業です。世界では70%、日本でも66%のシェアを農業用水が占めています。残りを工業用水と、都市用水、発電用水が分け合っている構図です。それならば、世界の水議論の場で、農業からの発信、意見、主張が6~7割を占めているかということ、悲しいかなその1/10もないほどの状況でした。

世界水フォーラムは、国連機関でもなければ政府間機関でもない、公的な位置づけのない一民間団体、いわゆる国際 NGO である WWC のノウハウ支援によって、3年に1回、その時のホスト国が半官半民で主催する非公式な国際会議です。しかしながら、世界の水関係者が一堂に会し、3年分の議論の蓄積をぶつけ合い、非公式ながらも水を担当する関係閣僚会議が大規模に開催されます。彼らの狙いは、世界水フォーラムをはじめとする国際水議論の場を足掛かりにして、水資源の管理や水利用に関する世界的な議論の流れを作り、公式な場である OECD や国連関係の会議、先進国首脳会議などでの議論にこれを持ち込むことです。水問題には沢山のセクターが関わりますが、これらの公式な場での結論に、少しでも自分たちのセクターに有利な情報を盛り込むため、世界水フォーラムの場を借りて発信し、有力な主張の素材づくりを行い、賛同する仲間を探しているのです。

この5年間私は、中山間、棚田、費用対効果分析、地方自治と、国内行政の問題に没頭していましたが、昔取った杵柄の国際感覚で世界水フォーラムの位置づけ、力量と意義を分析し、上記のような認識に達しました。やるべきことは、主張すべき点を明確にし、ターゲットにするセクターや国を定め、彼らから共感と支持を得られるよう理論武装を行って、それを英語で発信することです。それができなければ世界の水議論の場では蚊帳の外に置かれてしまい、たとえ流れが悪い方向へ向かおうとも、大きな流れに身を委ねるしかないのです。

私は2003年3月のWWF3で農業セクター、特に日本と共通項の多い湿潤温暖なモンスーン・アジアの農業セクターから、必要にして十分な英語による発信を行うため、農業土木組織の総力を上げて取り組むよう提案し、具体案を作成します。その手始めが、本番の丁度1年前の2002年3月に、JIIDと農業土木学会及び滋賀県との3者共催による、農業土木陣営として初めての大掛かりな国際シンポジウムの開催でした(2002山岡)。しかし関係者は誰もこうした国際会議の主催経験がなく、ノウハウを知りません。教えてくれる相手がないのなら自ら学習するしかないという覚悟を決め、国際水議論の現場をこの目で確かめるため、この年の夏、スウェーデンへ飛び、ストックホルム世界水週間会議(WWW: World Water Week)に参加します。

この出張で収集した情報とともに、ワシントンの世界銀行本部に出向している農水省の後輩に教を乞い、このような会議を開催するために必要な手順を一つ一つ聞き取りました。まずは、共催団体と調整し、主テーマと趣旨、開催地、日程等を定めて英語の概要を作成し、当該分野の有力な組織に後援を依頼します。国際シンポジウムですから、後援団体はFAO、WB、IWMI、ICIDなどの国際機関です。会場、スタディツアー、宿所などのロジ(サブ(サブスタンス)に対応する用語で、ロジスティクスのこと)を固め、ファーストアナウンスメントを英語で作成し、リストアップした講演候補者にプレゼンテーションを依頼します。英語と日本語の同時通訳、MCなどを手配し、予算に応じて会議の参加者の規模を決め、聴衆を募りあるいは動員を割り当てます。そして本番では海外からの演者の受入れ、移動、運営、記録、議長ステートメントの取り纏め、公表など、全てが初めての経験でした。

約7か月かけて準備し、成功裏に開催したこの国際シンポジウムを予行演習と位置付けて、その経験を踏まえて、2003年3月のWWF3本番での大掛かりなセッションの開催へ向け、2002年の夏より準備を始めました。経験済みのJIID、農業土木学会及び滋賀県はもと

より、未経験の農業土木関係の他団体も複数動員し、セッションのスケジュールを割り当て、多彩な議論を展開して農業用水部門の存在感を高めます。合わせて、世界の水議論の場への効果的な発信を行うため、無駄の多い水利用の典型としてそれまで強い批判に晒されてきた水田灌漑について、モンスーン・アジアの気候風土に適した経済合理性の高い水利用であることを解き明かした書籍「A Message from Japan and Asia to the World Water Discussions」(邦題：世界的な水議論の場への日本／アジアからの発信)を英文と和文で執筆し、WWF3 の会場で無料配布しました(2003a Yamaoka, et.al, 2003 小林他)。この書籍は、図表を多用して分かりやすく図解した膨大なデータ集と4編の本格的な論文から成り、とにかくこれでもかと、様々な角度から湿潤気候下での水田灌漑の合理性を論述しています。ターゲットは、世界中のエコノミストやかんがい排水関係者です。しかも和英両文の冊子があるので、読者が海外で主張する英文の資料作りにも大いに役立ちます。



この他、WWF3 の機会を利用して農業用水セクターのプレゼンスを最大限高めるため、農水省に対して私は二つの提言をしました。まず、WWF3 の機会にアジア諸国の農業用水担当大臣を招待し、日本の農水大臣をホストとする非公式大臣会合を開催し、共同宣言を公表すること、そして、これを一過性のイベントに終わらせないため、関係国の国際ネットワーク(後に、INWEPF: International Network for Water and Ecosystem in Paddy Fields (国際水田・水環境ネットワーク)と称されます)を設立することをこの会合で宣言する、ということです。WWF3 後に、私を含む農水省の準備チームにより作業が進められ、2004年2月に、関係10か国、11国際機関、6国内機関から代表が参加して、都内でINWEPF設立準備会議が開催され、同年11月にINWEPFの第1回運営会議が開催され発足して以来、毎年1回加盟国の持ち回りで2019年までに16回の運営委員会を開催しています。

世界水フォーラムには、この後も長く関わり続け、2006年のWWF4(メキシコ・メキシコシティー)、2009年のWWF5(トルコ・イスタンブール)、2012年のWWF6(フランス・マルセイユ)、2015年のWWF7(韓国・慶州)に参加して、セッションでの発表や日本ブースでの展示発表に尽力します。なお、2012年から2015年までの3年間は、私は世界水会議(WWC)の理事に選出されて、この間は世界各地で開催されたWWCの理事会にも出席し、日本からの、そして農業用水セクターからの発信を積極的に行っていました。

JIID時代には、世界水フォーラムの他にも、水、土、環境などの様々な論点を世に問うた

めの書籍「水土の知を語る」の新規刊行など、調査研究第二部長として斬新な発想で様々な業務を行いました。割愛させていただきます（2002 小林他、2003 山岡他、2003 落井他、2003a 山岡、2004 山岡）。このように、恐らく他の誰も真似のできない発想と企画力、行動力で、これだけ多くの貢献をしたのですから、次は本省のポストが待っているに違いないと期待していた私に下された辞令は、筑波山麓への島流しというものでした。

流罪遠島を命ずー(独)農村工学研究所 2003-2006

JIID 時代には何もポカはなかったわけですから、やはり原因は山口県時代にあったのです。2003 年 4 月、つくば市に所在する農村工学研究所に用水管理研究室長として着任します。研究者ポストへの配置転換は、これから定年退職まで研究職としてご奉公ください、という無言の通牒であり、よほどのことがない限り行政職への復帰はありません。つくばの研究所は、事実上、行政職にとっては出世の道が断たれる流刑地のひとつと認識されていました。この時期の私の落胆は、筆舌に尽くしがたいものがあります。それでも毎日、都内からつくばまで車を運転して通勤し、仕事以外に何か継続できる楽しみを見つける努力をしました。

研究職には研究者の世界のルールがあり、研究室長になるにはそれまでに一定の記事、論文、書籍等の執筆実績が必要です。その中でも研究職俸給表 5 級の研究室長になるための要件は、ハードルが一段高いものでした。私は行政職であったにも関わらず、それまでに多数の執筆活動を行っていたため、この基準をクリアしました。私はその時点で最も若い 5 級の研究室長の一人であったであろうと思われまふ。このことで、正直に申し上げますと、まだ自分には可能性があるかもしれないと、ほんの僅かながら行政職復帰の望みを抱いていました。そのための必要条件は、博士号の取得に違いないと、勝手に解釈していました。

青天の霹靂で俄かに研究職に転じ、その世界の掟や価値観をよく理解する間もないまま、とにかく学会誌に報文を数多く投稿すればよいのだらうと、これまた勝手に解釈していました。執筆活動そのものは得意な方なので、2003 年から 2004 年までの 2 年間に、農業土木学会誌に報文 5 本（2003 山岡他、2003 落井他、2004 丹治他、2004 山岡他 a、2004 山岡他 b）水文・水資源学会誌に 1 本（2004 山岡）、2006 年までに農村計画学会誌等にさらに 6 本（2005 山岡他、2005 山岡、2006 友正他、2006 凌他、2006a 山岡、2006b 山岡）を掲載します。2003 年から 2004 年までに英文の国際会議報告論文も 6 本（2003 Yamaoka、2004 Tomosho, et.al、2004 Ren, et.al、2004a Yamaoka, et.al、2004b Yamaoka, et.al、2004 Liu, et.al）、2006 年までに英文誌を含めさらに 9 本（2005a Yamaoka、2005b Yamaoka、2005 Yamaoka, et.al、2005c Yamaoka、2006a Yamaoka, et.al、2006b Yamaoka, et.al、2006a Yamaoka、2006b Yamaoka、2006 Tassanee, et.al）を掲載しました。著書は 2003 年（2003b 山岡）、2004 年（2004 山岡）、2006 年（2006 山岡他）に各 1 冊を共著で上梓しています。しかし肝心の農学博士学位請求論文の執筆は一向に進みませんでした。それは、やるからには何事にも完璧を追求する性格が災いしたのだと思います。完璧な博士論文などこの世にはないのだということを知ったのは、かなり後のことです。

用水管理研究室長時代には、農水省からの協力要請を受けて、いわゆる行政対応を数多くこなしました。具体的には水問題を議論する国際会議、専門家会議等に参加して、日本の主張

について論陣を張ることで。例えば、2003 年は韓国慶州市、2004 年はニュージーランド・パルマストン、2005 年はオーストラリア・アデレード、2006 年はフランス・パリの本部で開催された一連の経済協力開発機構 (OECD) 専門家会合に日本の代表として単身出席し、OECD のお抱えエコノミストたちを相手に、湿潤気候下での水田灌漑の経済合理性について、論陣を張りました (2003 Yamaoka, 2004b Yamaoka, et.al, 2006b Yamaoka)。

相手は経済の専門家ですし、しかも英語での小難しい経済議論という、戦う土俵のハンディキャップがあります。しかし、私も生源寺教授から授かった教えをベースに経済学者の論点、論法を理解していたので、一步も引かずに議論しました。欧米のエコノミストたちよりも遙かに水田農業の現場の実態に精通しているという自負、そして、20 年以上前に農水省の面接試験を受けた際の自分の言葉「農家の人たちや農業関係者に代わって、彼らの思いや農業への理解を訴える通訳者になる」が、背中を後押しします。こんなところでいくら頑張っても、苦手な英語で、しかも厄介な経済学者たちを相手にいくら苦勞したところで、官吏としての出世の道は閉ざされているのですが、自分を必要としている人たちがいる、自分にしかできないという思いが、私を突き動かしていました。

その他にも、農業用水が発揮する多面的機能に関する発表 (メコン委員会ワークショップ於ベトナム、その他世界各地)、農民参加型灌漑管理 (PIM) に関する国際会議 (アルバニア、タイなど) での発表、農村のソーシャル・キャピタルに関する調査 (英国)、2006 年にメキシコで開催された第 4 回世界水フォーラムでの日本ブース展示発表や、毎年開催される国際かんがい排水委員会 (ICID) 国際執行理事会などへの ICID 日本国内委員会委員としての対応、INWEPF 運営委員会への対応など、国際経験がまだ十分でない農村工学研究所という組織にあって、水関連国際会議に対処する事実上の日本政府代表団長として一人気を吐いていました。何だかんだ言いましても、世のため人のためになる公の仕事、しかも他の誰にもできない特命業務、挑戦的でリスクの高いミッションがあれば、逃げずに挑みやり遂げる意欲が湧くという、私の三つ子の魂は、どこへ行っても変わりませんでした。

2006 年 10 月、この研究所に転任してから 3 年半という長い月日をかけて、念願の農学博士号を東京大学で取得します。しかし農水省からは、望んでいた行政職への復帰ではなく、東京大学大学院農学生命科学研究科に設けられる新たな寄付講座の公募教員ポストを取りに行くようにと、ご下命が下ります。

教育者として—東京大学大学院農学生命科学研究科 2007-2010

2007 年 1 月、公募に応募したプロの研究者たちの中から選抜され、東京大学大学院農学生命科学研究科「共生社会基盤形成を通じた国土の保全管理学」寄付講座客員准教授として着任します。担当教員として、この寄付講座の予算は全て私が管理することとなり、その中から自分の給与や研究費を捻出します。着任後にまず私が取り組んだことは、この予算を使って、ある有能な若手研究者をリクルートすることでした。東京大学法学部を卒業後、社会人を経て東京大学大学院新領域創成科学研究科で博士号を取得、そのテーマが農業水利学分野という稀有な人材が就職先を探しているという情報を得て、私はすぐに動きました。

後に私は同寄付講座を担当する特任教授に昇進し、リクルートした有能な特任助教と力を合わせてこの講座を運営していくこととなります。私の教育者としての座右の銘は、ウィリアム・アーサー・ウォードの名言「平凡な教師は必要なことを語る、良い教師は教え説明する、優秀な教師は自らやってみせる、されど、偉大な教師は心に火を点ける」です。

東京大学の教員時代に私は、前職時代と同様に様々な行政対応を引き受け、水に関する国際会議を飛び回り、農水省の様々な委員会の委員にも就任しました。2007年5月から2008年9月まで、日本学術会議特任連携会員並びに日本学術会議第2部農学基礎委員会水問題分科会委員に就任して活動するという、学術研究者として名誉な体験もいたしました。また、2009年秋には東京大学公開講座「水」の講師陣の一翼を担い、ライフワークともいえる「農業水利におけるガバナンスの発展とソーシャル・キャピタルの蓄積」と題する講義を行いました。しかし正直に申し上げて、東京大学の教員時代に私は、自分が出せる力の半分も出していなかったのではないかと思います。

その理由の一つは、東大への着任直後、2007年2月の母の他界です。私が海外調査のため米国西海岸へ渡航中に、難病を患って前年の晩秋から入院中の母が危篤状態となり、私は最速の便で急遽帰国しましたが、成田空港から都内の病院へ駆けつける間に、母は息を引き取りました。その後私には、とてつもない虚無感が襲ってきました。思い返せば前年の秋、母は体調が悪い中、私の農学博士号授与式に参列してくれて、東大の教員となる私に、これが一番私に合った良い仕事だと労ってくれました。私が行政官としてバリバリ仕事をしていた頃から、常々母は100%ではなく50%を目指しなさいと、スローダウンを奨めていました。攻撃的で、肉を切らせて骨を断つことを厭わない性格の息子が、常に完璧な100%を目指しては、いつかオーバーヒートすると案じていたのでしょう。

着任した年の春に東大の教員を対象とした健康診断があり、受診後何か月かして忘れた頃に、大学から呼び出しがありました。指定された医師に面談すると、私には鬱症状が見られるので、再検査が必要とのことでした。自分には全く自覚症状がなく、健康そのものだと思っていたので、この通告は青天の霹靂でした。自分では気付かぬうちに、心の病の入り口に立っていたのです。そう言えば、母と同じ年頃の女性を街中で見かけると、どうしようもない怒りが度々込み上げていました。なぜこの人たちは生きていて、母は死なねばならなかったのか、という理不尽な怒りです。そんなことを考えても母は決して喜ばないと理性で分かってはいても、自分も死んでしまっても構わない、全てのことが無意味だと、虚無感が心を埋め尽くす日もありました。描いていたキャリアデザインが180度ひっくり返ったことも一因だったのでしょう。結果的に私は母の言葉通りに、50%を目指すくらいの力の配分で、東京大学特任教授としての3年間を大過なく過ごしたのです。

この致命的な虚無感にハイジャックされた私の精神状態を結果的に救ってくれたのは、私の長女の存在でした。長女は学校では授業についていけずイジメに遭うような生徒でした。大学を出たものの、就職氷河期で定職に就けず、パート等も長続きしない、不器用で、人とのコミュニケーションの取り方が下手な子でした。注意されても何度も同じ失敗を繰り返す。だから、どこへ行っても相手を怒らせ、暗に邪魔者扱いされます。それなのに、本人は裏表なく、他人を妬まず、陰で不満も悪口も言わず、打たれ強い。常々それが不思議でなり

ませんでした。悔しくないのか。見返してやろうと思わないのか。

子供の成長を願う親として、我が娘ながら情けない、としか思えなかった長女が、心の病の入り口に立つ私には、逆境でも平常心を失わない羨ましい存在に見えたのです。そしてじっくりと彼女を観察して、ついに謎が解けたのです。彼女は普通の人たちよりも、良く言えば自分のことが好きで自分を責めない、徹底して自己愛が強いのです。何かが出来る自分が好きなのではなく、何も出来なくても、とにかく自分の存在を愛していて、決して自分を責めないことで、自分を守っているのです。大昔に釈迦が瞑想により悟りを開き、この極意を弟子たちに伝えましたが、肝心の瞑想法が立ち消えとなります。これをビルマの僧ゴエンカ師が復活させ、ヴィパッサナー瞑想法として普及します。この瞑想法が教えるところが、まさに長女の自己愛に通じていたのです。瞑想により自分の存在にのみ意識を集中し、ただ自分の生のみを感じ、自分を愛することで、煩惱やしがらみ、苦痛や喜怒哀楽、出世欲も独占欲も、全てを自分から遠ざけることができる、というものです。自分を愛せない者は、ましてや他人を愛することはできないのです。この精神コントロール法を実践し、身に着けることで、私は虚無感という悪霊を退散させることができたのです。

東京大学農学部の教授や准教授などの教員は、正式には全員が上位組織の東京大学大学院農学生命科学研究科に所属し、農学部というのは学生が所属する大学の一組織です。この農学部のキャンパスは、東京大学の本郷キャンパスと言問通りを隔てて隣接しており、私の自宅から歩いて 25 分の距離でした。春から夏にかけては自転車通勤で往復していましたが、歩きながらも自分に意識を集中するというヴィパッサナー瞑想法を毎日実践するため、その後は徒歩で通勤します。結果的にはこの徒歩通勤が心身の健康維持に効果を発揮し、2010 年に二度目のつくばへの転勤を命ぜられたときにも動揺することなく、その職場にテニスコートがあることをポジティブに捉えます。そして、東京ではなかなかできないテニスを毎日プレーできる職場は、遠くても通勤する価値があるという心持ちにさせたのです。

ここでの 3 年間で上げた主な業績は、上述のほか、学部学生（4 年生）及び大学院修士課程の学生の教育指導、論文指導、2007 年 1～6 月日本中国友好協会発行の日中友好新聞署名付記事 6 編掲載（2007 山岡他）、同年 3 月農業農村工学会誌「水土の知」への総説掲載（2007 宮崎他）、日本水土総合研究所報告書（2007 山岡）及び英文ガイドラインの共著（2007 Satoh, et.al）、同年 6 月 INWEPF タイ会合での基調講演（英文論文提出）、同年 10 月東大農学部の機関紙「弥生 45 号」への寄稿、同年 11 月 FAO の世界農業遺産に関連した国際会議での発表（インド・シッキム）、同年 12 月国際水土里フォーラムで基調講演（新聞記事に掲載：2007 山岡）並びに INWEPF 運営会議への論文提出発表（英文：2007 Yamamoto, et.al）、2008 年 1 月国際学術誌 Paddy and Water Environment への論文掲載（英文：2008 Yamaoka, et.al）、同年 3 月農業農村工学会報告書の共著（2008 杉浦他）並びに農村総合整備全国研修会（テキスト作成：2008 山岡）、2009 年 3 月農業農村工学会誌「水土の知」への論文掲載（2009 岡島他）、同年 6 月 NOVA science publications (New York, USA)「Social Capital」の共著（第 10 章の執筆担当：2009 Yamaoka, et.al）、同年 7 月棚田学会 10 周年記念誌「ニッポンの棚田」への寄稿（2009 山岡）、同年 8 月棚田学会誌への論文掲載（2009 山岡他）、Low External Input and Sustainable Agriculture 誌への英文記事掲載（2009 Yamaoka）

などです。

この 3 年間は、本当にプロの教育者として、大学等の教育機関のパーマネントな職に納まるか否かのテスト期間であったのだと思います。残念ながら、自分自身に全くその気がなく、魅力を感じることができず力を出し切っていなかったのも、どこからもお呼びが掛からず、3 年間の任期を満了して、農水省の本省へ一旦帰任するのです。

研究者として－(独)国際農林水産業研究センター (JIRCAS) 2010-2020

① JIRCAS での業務の概観

2010 年の 1 月から 3 月まで、農林水産省の本省で、いわゆる待命ポストに座ります。同年 4 月に下りた辞令は、再度つくば市所在の研究所、しかし前回とは異なり、(独)国際農林水産業研究センター (JIRCAS) への転籍出向でした。もうここまでくれば、どこに島流しされようとも、平常心で受け止めるのみです。再び毎日車を運転して、首都高速から常磐道を経由して片道 1 時間余の通勤が始まり、これを 10 年間続けて現在に至ります。往復の高速道路料金とガソリン代を足し合わせると 1 日当たり約 4,500 円かかるので、毎月平均 22 日の出勤で 99,000 円になります。通勤手当には上限があるので、毎月 50,000 円余の持ち出しです。年間 60 万円、10 年間で 600 万円に及ぶ莫大な出費を許してくれた家内には頭が上がりません。自宅から職場まで、電車を乗り継ぐと片道 2 時間弱かかります。それだけ時間をかけて通勤を続ける体力的、精神的な自信がなかったのと、単身赴任するよりは安上がりというのが、自動車通勤を選択した一応の理屈でした。しかし、本音を言いますと、自分の中では流刑地だと思っているつくば市の研究所へ通い続けることは、いまにも心が折れそうなことだったのです。往復 4 時間も時間をかけて通い続ける意味があるのだろうか。そんな気持ちを抑えるための我儘が、往復 2 時間の車通勤でした。この思いを家内が理解してくれた、というのが実のところだったのです。家内も私が毎日自宅へ帰ることを強く望んでいたことが、単身赴任ではない自宅からの車通勤を後押ししました。

独立行政法人であったこの研究所は、独立行政法人通則法の一部を改正する法律の施行により、2015 年 4 月をもって国立研究開発法人となります。独法改革により、他の多くの研究系独法が合併統合される中で、正職員の研究者が 150 名足らずの小さな組織が、どこにも統合されずに単独で (国研) として残ったのは、その業務が極めてユニークで統合すべき類似の組織が存在しなかったからです。法の定めるところにより、国際農林水産業研究センターは、「熱帯又は亜熱帯に属する地域その他開発途上にある海外の地域における農林水産業に関する技術上の試験及び研究等を行う」とされていて、「これらの地域における農林水産業に関する技術の向上に寄与する」ことを目的としています。研究のフィールドが 100% 海外にあるという点では、日本で唯一ともいえる国立研究機関なのです。

この研究所には 2010 年度から 2019 年度までの 10 年間在籍しましたので、この長さに比例して多くのエピソードがあります。良い思い出も悪い思い出も、数え上げればきりがありません。2020 年 3 月に定年退職した後、2020 年 4 月から現在まで引き続き再雇用職員として継続勤務しています。ここでは、アジア、アフリカを中心とした海外出張に毎年平均 6

～7 回出ており、手許の記録によれば 10 年間での海外出張は 65 回に及びます。この中には 1 回の出張で 2～3 か国を廻り、業務を行ったものがあり、業務のために訪問した国の数は 10 年間の累計で延べ 85 か国になります。各年度の訪問国の内訳は以下の通りです。

2010 年度（延べ 10 か国）ケニア、タンザニア、ガーナ（2 回）、韓国、インドネシア、中国、セネガル、シエラレオネ、エチオピア

2011 年度（同 5）イラン、ウガンダ、インドネシア（2 回）、フランス

2012 年度（同 7）オーストラリア、インドネシア（2 回）、カメルーン、フランス（2 回）、セネガル

2013 年度（同 8）韓国（3 回）、スウェーデン、オランダ、トルコ、インドネシア、ケニア

2014 年度（同 5）メキシコ、スウェーデン、韓国、インドネシア、フランス

2015 年度（同 9）韓国、中国、ガーナ（3 回）、マレーシア、スウェーデン、フランス（2 回）

2016 年度（同 12）インド、エジプト、ミャンマー（4 回）、ガーナ（3 回）、ケニア、タイ、台湾

2017 年度（同 9）ミャンマー（5 回）、ガーナ（3 回）、メキシコ

2018 年度（同 10）ミャンマー（5 回）、ガーナ（3 回）、カナダ、フランス

2019 年度（同 10）ミャンマー（6 回）、ガーナ（3 回）、インドネシア



パーボイルドライスの煮沸
（2011.2、シエラレオネ）



WWC 理事として記念手形
プレート寄贈（2015.4 韓国）



地方銀行の頭取等と協議
（2020.3、ガーナ）

日本から往復の移動日数も含めると、1 回当たりの出張日数は 1～3 週間、平均 2 週間として 65 回を掛けると 910 日間となります。この 10 年間、3,652 日のうち 1/4 の 2 年半は日本国外にいたという計算です。とりわけ、50 歳代後半になってからの直近 5 年間での延べ 50 か国への出張は、我ながら表彰ものだと思っています。海外出張は、まず事前の準備として、国際会議ならば参加登録から始まり、英文ペーパー（論文）の執筆と提出、滞在中のスケジュール作りと訪問先への連絡及びアポ取り、出張計画確定のための所内の手続き、航空券とホテルの手配、滞在先での足の確保（途上国の場合は運転手付きの車の借り上げ手配）、数千ドル程度の外貨の準備、調査出張の場合はさらに現地での調査のための諸準備が加わります。出張中は英語での業務、そして帰国後には出張報告書の作成、さらにはデータの整理や、旅費や海外で支払った資金の精算処理などフォローアップを行いますので、1 回の海外出張に要する時間とエネルギーはかなりのものになります。基本的にこれらの作業を全て一人でやりますので、50 歳代後半で年間平均 10 か国への出張は、よほど好きで慣れていなければこなせないだろうと思います。

これらの海外出張は、それぞれ行先国が異なれば目的も異なり、海外のカウンターパートが同行する単独行動の場合もあれば、複数の日本人での団体行動の場合もあり、両者が組み合わさった場合もあります。まずは、病気や怪我をせずに安全に行動すること、そして強盗、スリ、詐欺などの被害に遭わないようスキを見せないこと、トラブルに巻き込まれないように注意を払うことが肝要です。万が一、海外でこのようなことがあると、関係者に多大なご迷惑をおかけし、手間のかかる後処理等を要します。安全を確保した上で、所期の目的を果たし、訪問国の関係者と良好な関係を構築してることが求められます。

② 最初の出張はアフリカ 3 か国

延べ 85 か国への業務出張は、それぞれに思い出があります。トラブルというほどではないにせよ、様々な想定外の困難に遭遇もしました。しかし、どうにか運よく難局を乗り切って、あるいは航空機の墜落事故や自動車事故等に遭遇することもなく、毎回無事に帰国できたことは本当に幸いでした。今の自分があることに感謝の言葉しかありません。個々の出張について書き始めますと紙面がいくらあっても書き足りませんので、このセンター在勤中に強く印象に残った出来事だけをいくつか挙げさせていただきます。

2010 年 4 月に着任してすぐに、5 月の連休明けに出発する 17 日間のアフリカ出張の計画を立てるよう指示がありました。行先は、東アフリカのケニア、タンザニア、そして西アフリカのガーナです。いきなりアフリカ！しかも 1 か月後です。幸いなことに単独行動ではなく、職場組織のトップである理事長と、アフリカに精通した研究者と 3 名での渡航で、ガーナは当該研究者と 2 名での行動計画となっていました。私の職場での肩書は研究戦略室研究コーディネーターというもので、自らがフィールドや実験室での研究を行うというよりも、組織の代表として国際会議に出席する案件が主体になります。

センターでの私のデビュー戦となるこの出張では、理事長の鞆持ちとして、ケニアではナイロビに所在する国際機関の ICRAF、ILRI、ICIPE の各本部、並びに Bioversity 及び IITA のナイロビ事務所を訪問して各組織のトップと意見交換を行い、ナイロビ郊外の JICA 稲作関係プロジェクト「ムエア灌漑開発事業地区」を視察しました。また、タンザニアではアフリカ稲作振興のための共同体（CARD）運営委員会及び第 3 回 CARD 総会に出席するとともに、私がオーガナイザーとなって同総会の中で丸一日に渡り CARD サテライトセミナーを開催しました。最後のガーナでは AGRA 事務局、FARA 事務局、IWMI 地域事務所、並びに CAIR 事務局を訪問し、意見交換を行うとともに、地方都市のタマレ及びクマシに所在する JIRCAS の現地研究サイトを視察しました。

これら 3 か国はいずれも私にとっての処女地でしたが、数多くの国際機関への訪問と、研究コーディネーター時代のメインの業務となる CARD の運営委員会と総会への出席、国際セミナーの主催と司会、そして後にアフリカでの研究拠点となるガーナでの現地視察と、非常に密度の濃い実り多い出張を行うことができました。2010 年度には、さらに 12 月に FAO の地域ワークショップに参加するためセネガルのダカールへ、2 月に CARD 運営委員会に出席のためシエラレオネのフリータウン、並びに JIRCAS 現地研究サイトを視察するためエチオピアのアジスアベバとバハルダールへ足を運びました。アフリカ大陸は JIID 時代に

一度だけ、南アフリカ共和国のヨハネスブルグで開催された、2002年のリオ+10（プラス・テン）の会議に参加するため、足を踏み入れたことがあります。それ以来の渡航で一年に6か国も訪問し、いきなりこの研究所でもトップクラスのアフリカ通になってしまいました。

そう言えばJIID時代に、南アフリカ共和国のヨハネスブルグでは、滞在中に39℃前後の高熱が出て、下痢症状も酷く往生して、在南ア日本国大使館の医務官に診ていただいたことがありました。医務官の見立てでは、日本から香港経由の便で南アへ渡航して2～3日経ち、大腸の腸内細菌群が日本由来のものから南ア由来のものに入れ替わった際に、腸の免疫システムが過剰に反応して高熱が出たようです。これは海外渡航ではよくあることだそうで、強力な殺菌剤を処方して頂き服用すると、次の日には治まりました。この症状は外国からの帰国時にも、帰国後2～3日目くらいに良く生じるとのことでした。

この経験以降、海外出張中も日本由来の腸内細菌群を大腸内に維持し、腸内細菌群の入れ替えが生じないようにするため、小さなパック入りの納豆を持参して毎朝食するようにしました。この予防策はよく効いて、出張中も帰国後も下痢や高熱が出ることはなくなりました。ただ、アフリカでは泊まるホテルによっては部屋に冷蔵庫がないことがあり、高温下で納豆が腐ってしまうため、袋入りのドライ納豆を試してみましたが、効果があまり現れず上手く行きませんでした。そこで見つけたのが、納豆菌末と乳酸菌末を成分とする「ザ・ガード」という錠剤で、海外出張や旅行には必ずこれを携帯し、毎朝飲むことで下痢や高熱の予防に成功しています。なお数年前からは、日本にいるときも「ザ・ガード」を毎日服用し、腸内の納豆菌と乳酸菌を日常的に補給することで、毎日のお通じが劇的に改善されています。

③ 国際かんがい排水委員会 (ICID)

1950年にインドで設立された国際かんがい排水委員会 (ICID) は、世界の110の国と地域が加盟し、灌漑排水に係る技術・組織、行政や制度を議論する世界最大の国際組織です。日本においては、1951年の閣議決定に基づいて、ICID日本国内委員会 (JNCID) が組織され、ICIDへ加盟し、JNCIDの事務局を農林水産省農村振興局内に置いています。私は2008年より2020年まで12年間に渡りICID日本国内委員会の委員を務めました。それ以前にICIDの国際執行理事会 (IEC: International Executive Council) には、農水省事業計画課長補佐時代の1998年にインドネシア・バリ島で開催された第49回IECに、日本国内委員会の事務局長代理として参加し、ICID副会長選挙に立候補した大先輩の選挙参謀として現地で汗をかいたほか、JIIDの部長時代にも日本国内委員会のサポート役として2001年に韓国・ソウルで開催された第52回IEC、2002年にカナダ・モントリオールで開催された第53回IECに参加しました。農村工学研究所用水管理研究室長時代には、2003年にフランス・モンペリエで開催された第54回IECに参加し発表を行っています。2008年にJNCID委員に就任してからは、JIRCASへ転任後、2010年インドネシア・ジョグジャカルタを皮切りに、2011年イラン・テヘラン、2012年オーストラリア・アデレード、2013年トルコ・マルディン、2014年韓国光州、2015年フランス・モンペリエ、2016年タイ・チェンマイ、2017年メキシコ・メキシコシティ、2018年カナダ・サスカトゥーン、2019年バリ・インドネシアと10年連続で参加し、様々な発表や議論を行ってきました。

この組織は、世界のかんがい排水技術者、研究者、行政担当者、民間事業者、その他かんがい排水関係者が一堂に集ういわば仲良しグループです。”Irrigation and Drainage”という国際学術誌を発行する国際学会のような一面も持ち合わせていますが、アカデミックな敷居の高さはそれほど感じさせることなく、かんがい排水技術に関して有益な情報であれば何でも持ち込んでくださいというスタンスです。ICID それ自体のステイタスは、その組織の大きさはさておいて、あくまでも国際 NGO なのですが、各国の国単位で ICID 国内委員会を設立し ICID に加盟するという点がとてもユニークです。このため、各国に設立された ICID 国内委員会は、かんがい排水のイシューに関してその国を代表する組織とみなされています。ICID の総会や IEC への参加・出席者は、少なくとも仲間内では国を代表する代表団のようなイメージで捉えられており、デレゲーションと呼ばれます。

各国の事情によってそれぞれ異なりますが、アジア諸国や日本は ICID 国内委員会と中央政府のかんがい排水担当省庁との結びつきが強く、デレゲーションも当該官庁が人選や予算面を仕切っていて、構成員の中核は行政関係者が占めています。欧米諸国はどちらかというと政府との結びつきは弱く、研究資金が潤沢な学者や研究者が個人的に参加するケースや、それに水利団体を束ねる半官半民組織、パイプやポンプ、ゲートなどのかんがい排水施設の資材を技術と抱き合わせて販売する民間企業などが加わって、デレゲーションを構成するケースが多いようです。アフリカ諸国からの参加者は、エジプトのようなアジア型の参加形態の国もあれば、アフリカからの参加者を増やしたい会議の主催者に、学者や研究者が一本釣りされているケースがサブサハラアフリカ諸国には多く見られます。後者の場合の旅費などの資金源は、国際機関や欧米先進国の援助機関であるとみられます。

ICID の最高執行機関である IEC の会議は、加盟国国内委員会が持ち回りで招聘しホストして毎年開催されます。IEC は数多くの常設委員会やワーキンググループで構成され、2 時間から半日程度の IEC 関係会議がパラレル（同時並行）に次々と 3~4 日間かけて開催され、各国のデレゲーション構成員は手分けしてこれらに対応します。さらに学会発表会のような総会 (GA: General Assembly)、あるいは世界かんがい排水会議 (WIF: World Irrigation Forum) を IEC 直前の 2~3 日間程度の期間設定で、それぞれ 3 年毎に開催します。このため、ICID の会議全体は 1 週間程度の会期となり、この間連日会議後の夕食時にレセプションなどのイベントが開催されます。欧米や最近では日本からも増えましたが、配偶者を同行している参加者もいて、レセプションは国際的な社交の場でもあります。面白いことに以前は、欧米先進国がホストした年のレセプションは簡素、シャビーな感じのことが多く、アジア諸国がホストした年のレセプションは中央政府がバックについていて、概して料理もその他の演出も質が高く、かなりの差がありました。最近では、欧米諸国でのレセプションも以前よりはかなりさまになってきています。

ICID は何か権限を行使したり、勢力を拡張したりすることが目的ではなく、国際的に組織された技術者の親睦団体のようなものです。勿論会議につきもののステートメントや様々な文書が決定されたりしますが、拘束力のあるものではなく、社会に影響を及ぼすようなものではないので、気が楽です。OECD の専門家会議などで丁々発止を繰り返してきた私としては、大変居心地の良い一週間であるわけです。ICID への参加者は基本的に利害の対立

はないので、恐らく関係者は毎年の会議を楽しみにしているものと思われます。ただし、国際的な社交場としての要素がかなりあるので、自国のデレゲーションメンバーとばかりつるんでいるのはどうかと思われます。この国際的な社交場としての要素がより強烈で、参加者間（セクター間）に潜在的な利害対立があり、OECD 専門家会議ほどではないにせよ緊張感を強いられるのが、次に述べる世界水会議（WWC）の理事会です。

④ 世界水会議（WWC）

2012年の晩夏、農林水産省から突然、世界水会議（WWC）の理事選挙への出馬を打診されました。WWC と言えば2003年の京都・滋賀・大阪でのWWF3で関わりを持って以来、私は押しも押されもせぬその第一人者であったはずなのですが、2003年、2010年と二度に渡りつくばに島流しとなった私には、もはや遠い世界の 이슈 になっていました。何で今更自分に白羽の矢が立ったのか、という疑問が本音です。この選挙は当選が難しく、これまで農水省からの推薦候補は二期連続で落選し、あの巨大な国際 NGO の ICID はおろか、国連組織の一員である FAO も落選を続けています。

その頃の私は、一応農水省関連の研究所ではありましたが、霞が関の本省から遠いつくばの片田舎で研究者に身を窶していたわけです。世間一般の価値観ではまあまあなのかも知れませんが、私の気持ちのうえでは世捨て人に近い感覚で生きていました。私が毎日通勤を続ける動機づけの原動力は、研究所の建物のすぐ裏にある全天候オムニコートで、テニス仲間たちと昼休みに打ち合い、ゲームをして汗をかくことでした。1時間の昼休みは、サンドウィッチと牛乳の昼食を5分で済ませ、コートに出て40分間汗をかき、クラブハウスでシャワーを浴びてデスクに戻るというルーティーンを確立します。これを真夏の炎天下でも真冬の木枯らしの中でも、雨か雪が降って不可能な日を除き、毎日続けたのです。こんなことは、東京では絶対に真似できませんし、これをやるためにつくばに来ているのだと、自分に言い聞かせていました。

仕事の面では、2010年度はCARD 総会絡みでアフリカ3ヶ国への初出張の後、インドネシアでの ICID 国際執行理事会及びアジア地域会議、韓国での INWEPF 運営会議、中国雲南省での第1回世界棚田会議（中国語名：首届世界梯田大会）、セネガルでの FAO ワークショップ、シエラレオネでの CARD 運営委員会に出席します。また、翌2011年度は東日本大震災の影響を受けて海外出張を半年間ほど自粛の後、イランでの ICID 国際執行理事会と総会、ウガンダでの CARD 総会、インドネシアでの OECD-ADB ワークショップ、フランスでの WWF6、オーストラリアでの ICID 国際執行理事会及びアジア地域会議に出席します。これら年間5~6回の国際会議出席のため海外出張する以外は、大分県、愛知県、北海道、岐阜県などへの国内出張と、後はたまに東京での会議への参加、所内の諸々の会議への出席くらいで、刺激が殆ど無い案件たちを相手に低空飛行を続けていました。

今はこうして自分の過去を振り返って足跡を書く自分がありますが、JIRCAS での最初の2年間は、目の前の海外出張等で忙しい日々を過ごしてはいたものの、自分の過去の足跡を記憶から完全に消し去っていました。過去の栄光は今の自分を虚しくするだけです。なので、過去の活躍のことは全て忘れ去り、全く別の人格として生きているような感覚でした。それが、

2012年の晩夏に、農水省からの一本の電話でひっくり返されるのです。

国際会議への出席や発表に、過去の業績は何も影響しません。ただ、その時の 이슈に対して、論旨を明確にした英文ペーパーを執筆して提出し、発表用のパワーポイントを作成すれば、後は英語の度胸さえあれば良いのです。しかし、WWCの理事選挙に出馬するとなると、立候補演説での英語の度胸も必要ですが、何と云っても「水」という 이슈に対する過去の実績がものを言います。他の立候補者たちもそれぞれの組織をバックに、自分が如何に水問題のスペシャリストでWWCに必要な人材か、売り込みを掛けてきます。

私はICID日本国内委員会をバックに立候補するわけですが、それだけでは全く知名度が低く弱すぎます。個人的にどのような資質があるのか、これまでの「水」イシューへの関わりを明らかにしなければいけません。それは具体的には、農林水産省の出先事業所で貯水ダム建設に従事していた時から始まり、本省構造改善局時代の農業水利事業の費用対効果分析、JIID時代のWWF3対応、農村工学研究所時代の水田灌漑の経済合理性をめぐるOECDでの議論、東京大学での水利エンジニア教育研究活動などです。組織も個人も知名度が低いわけですから、過去の自分の実績を総ざらいして売り込み、他の立候補者との比較優位性を印象づけねば、当選は覚束ないわけです。

選挙までわずか2ヶ月足らずという時点での打診には、恐らく私より先に声を掛けていた候補者から辞退されたのだらうと、見当がつかしました。私には勝算はありませんが、ここでお断りしたら、農水省はさらに困るだらうとも思いました。仕方がありません。暗い洞窟の中から引き摺り出され、封印していた過去の記憶を無理やりに全て呼び覚まされた以上は、結果を考えずにやるしかありません。できることはまず日本国内での根回し、そして短いキャンペーン期間ですが、自分を売り込むできるだけ効果的なレジュメやポスターなどを作成し、選挙が実施されるマルセイユのWWC総会に乗り込んだのです。まさに無我夢中とは、このことを指すのでしょうか。考えられる最善を尽くし、投票が行われ、開票の結果、当選を果たすことができました。

私はWWCの理事(Governor)として、3年間の任期中の理事会(マルセイユ、大邱、ブダペスト、慶州、メキシコシティ、マルセイユ、慶州&大邱、杭州、マルセイユ)には全て出席したほか、ストックホルム世界水週間会議にも3年連続で出席しました。また、WWCの運営に関する議論、並びに韓国で開催するWWF7の準備へ向けた議論の発展に貢献したほか、世界水遺産(WSH: World Water System Heritage)の認定登録制度をWWC理事会に提案し、ICIDが事務局となって運営する仕組みを制度化しました。



第50回 WWC 理事会
(2013.10、ブダペスト)



ハンガリー共和国アダー大統領主催晩餐会(2013.10)



第52回 WWC 理事会
(2014.6、メキシコ大統領公邸で開催)

WWC は各国の異なる水セクターが同床異夢で同居する、典型的なマルチステイクホルダー組織で、この理事会が事実上の最高決定機関です。以前に私は、WWC 理事会での議論も異なる水セクター間で、OECD の専門家会議のような議論の綱引きが戦われるものと想像していたのですが、そういったあからさまな議論や反論の応酬は WWF のセッションや、そのための準備会合では見られるものの、理事会では自分のセクターの存在感が少しでも引き立つように様々なアイデアをぶつけ合うという大人の対応がなされていました。しかも建前上全ての提案は、WWC のプレゼンスや社会への影響力の向上のためであるという錦の御旗の下で、本音をオブラートに包んで行われます。国際社会の中での企画力、発信力、多数派工作、資金源の開拓力やレントシーキングの能力が試されます。

余談ですが、昨今の話題として1年延期となった東京オリンピックに纏わり、IOC（国際オリンピック委員会）の理事会メンバーを「オリンピック貴族」と揶揄する声を耳にします。彼らは理事会を開催する訪問先の国々で大統領や首相に謁見し、高級ホテルに滞在して、歓迎レセプションの歓待を受け、まるで現代の貴族のように振る舞うからです。これと同じような光景を WWC の理事会でも目の当たりにし、確かにそういう世界があることに得心しました。但し、同じ貴族でも IOC が公爵なら WWC は男爵くらいの感じですが。

3年間の任期を終え、2015年の選挙にも立候補しましたが、日本が実力に見合わず立候補者を1名増員し国別定数上限の4名にしたことが仇となり、票が分散して私を含む2名が落選しました。これに懲りて3年後の2018年に日本は立候補者を、私を含む3名に絞りましたが、WWCの内紛（伝統的に WWC を仕切ってきた実力国のフランスとその番頭役のブラジルに新興勢力のインドが挑む構図。そこにトルコ、中国と韓国が初めはインドに組みするフリを見せて、土壇場でフランス側に寝返ります。日本は最後までインド-トルコ-中国-韓国と日本の連合を信じてインド側に付いたため、インドと日本はフランスに逆らう勢力とみなされ、フランス連合から鉄槌を食らわされ、立候補者は次々と落選させられました）に巻き込まれて、3名中私を含む2名が落選するという惨敗を喫したのです。

文献リスト

1. 山岡和純, 2002年
第3回世界水フォーラム (WWF3) プレシンポジウム-モンスーン・アジア水田灌漑の多面的な役割-
農業土木学会誌, 第70巻8号: 9-16
2. 小林英一郎, 山岡和純, 千葉佳彦, 落井康裕, 三輪亨, 岩村幸治, 太田泉, 2002年
『水土の知』を語る vol.1 『21世紀は水の世紀』
財団法人日本農業土木総合研究所 (東京都港区): 172p 山岡和純, 1990年
3. Kazumi Yamaoka, Yasuhiro Ochii, 2003年
A message from Japan and Asia to the world water discussions
The Japanese Institute of Irrigation and Drainage (JIID, Tokyo, Japan): 153p
4. 小林英一郎, 山岡和純, 落井康裕, 川本康宏, 高橋峻, 黒木卓, 虫明晋也, 2003年
『水土の知』を語る vol.3 『世界的な水議論の場への日本/アジアからの発信』
財団法人日本農業土木総合研究所 (東京都港区): 279p
5. 山岡和純, 柿田洋一, 落井康裕, 2003年
灌漑の多様性と多面的役割-国際水議論のスコープ拡大-
農業土木学会誌, 第71巻7号: 52-56
6. 落井康裕, 山岡和純, 2003年
主要テーマ「農業と食料と水」をめぐる議論と日本・アジアからの発信

- 農業土木学会誌, 第 71 巻 7 号 : 26-31
7. 山岡和純, 2003 年 a
モンsoon・アジアの農業水利と食料生産
食の科学, 第 305 号 : 30-38
 8. 山岡和純, 2003 年 b
世界最大の水ユーザー農業用水の意識革命 農政ジャーナリストの会編 : 日本農業の動き 146 号
“水” 問題の現在
財団法人農林統計協会 (東京都目黒区) : 73-91
 9. Kazumi Yamaoka, 2003 年
The relationship between water use in paddy fields and positive externalities: Japanese perspective and proposal
Report of an OECD Expert Meeting in Gyeongju, The Republic of Korea "Agricultural Water Quality and Water Use: Developing Indicators for Policy Analyses" : 188-215
 10. 山岡和純, 2004 年
湿潤地域の農業用水ー水利用の競合性と潜在価格が変動する資源ー
第 25 回農業土木学会国際問題シンポジウム「水田農業を巡るアジアのパートナーシップ」論文集 : 51-62
 11. 山岡和純, 2004 年
用水管理研究の展望 : 地球規模水循環変動研究と国際水田・水環境ネットワーク構想
水文・水資源学会誌, 第 17 巻 1 号 : 87-91
 12. 山岡和純, 落井康裕, 真勢徹, 2004 年
統合的水資源管理と農民参加型灌漑管理に関する考察
農業土木学会誌, 第 72 巻 3 号 : 43-47
 13. 丹治肇・山岡和純, 2004 年
ヴァーチャル・ウォーターの議論の発展性に関する考察
農業土木学会誌, 第 72 巻 4 号 : 33-36
 14. 山岡和純, 堀川直紀, 友正達美, 任永懷, 2004 年
モンsoon・アジア水田稲作の水利用の効率性と外部経済
農業土木学会誌, 第 72 巻 9 号 : 23-28
 15. Tatsumi Tomosho, Kazumi Yamaoka, 2004 年
Can PIM overcome social dilemma and attain sustainability?
The Collection of Theses of International Academic Forum for 2260th Anniversary of the Founding Du Jiang Yan Irrigation System in Chengdu, China : 89-93
 16. Yongfuai Ren, Masayoshi Satoh, Kazumi Yamaoka, Tatsumi Tomosho, Naoki Horikawa, 2004 年
A case study on the effects of water pricing on water saving irrigation
The Collection of Theses of International Academic Forum for 2260th Anniversary of the Founding Du Jiang Yan Irrigation System in Chengdu, China on 8-10 August 2004 : 77-83
 17. Kazumi Yamaoka, Naoki Horikawa, Tatsumi Tomosho, 2004 年 a
Water productivity and economic externalities of rice paddy agriculture in the Asian monsoon region
The Collection of Theses of International Academic Forum for 2260th Anniversary of the Founding Du Jiang Yan Irrigation System in Chengdu, China on 8-10 August 2004 : 64-71
 18. Kazumi Yamaoka and Tatsumi Tomosho, 2004 年 b
Indicators and methods of calculating the volume of net agricultural water use in basin scale in terms of impact on the environment
Proceedings of an OECD Expert Meeting, Palmerston North, New Zealand, March 2004 : p.38 (pp.1-15 in CD-ROM attached)"
 19. Liu Yulong, Kazumi Yamaoka, Ren Yonghuai, 2004 年
Multifunctioned breeding and social roles of irrigated water and rice field in Dujiangyan China
World Rice Research Conference 2004 Abstract : p.57
 20. 山岡和純, 2004 年
農業用水 水の特性と新しい利用技術ー農業・食品・医療分野への応用ー
エヌ・ティー・エス (東京都文京区) : 105-115
 21. 山岡和純, 佐藤政良, 堀川直紀, 友正達美, 任永懷, タサニー・ウンヴィチット, 2005 年
末端水利組合での参加型灌漑管理に関する農民の自発性と持続性の促進
水利科学, 第 286 号 : 61-83
 22. 山岡和純, 2005 年
異常渇水時における農業用水の節水と水道用水への水融通 ～渇水リスクのパラドックス克服に

- より蓄積されたソーシャル・キャピタルが果たす社会貢献～
農業技術, 第 60 巻第 12 号 : 25-29
23. Kazumi Yamaoka, 2005 年 a
PIM and water governance for holistic values of multi-functional paddy rice agriculture
RID/JICA Workshop on Approach to Participatory Irrigation Management in Udon-thani,
Thailand on Mar. 17-18, 2005 : 32-68
24. Kazumi Yamaoka, 2005 年 b
Multifunctionality of paddy field irrigation for a basin scale water cycle and bio-diversity in
Japan
Proceedings of the International Workshop on Multiple Roles and Diversity of Irrigation Water,
Beijing, China, International Commission on Irrigation and Drainage (ICID) : 123-142
25. Kazumi Yamaoka, Tatsumi Tomosho, 2005 年
Multi-functional roles of water in paddy rice agriculture –Conceptual features and policy
implications cited from Japanese experiences and studies–
The 3rd Regional Workshop on “The Programme to Demonstrate the Multi-functionality of
Paddy Fields over the Mekong River Basin” , Dason, Haiphong, Vietnam : 1-12
26. Kazumi Yamaoka, 2005 年 c
Externalities – The blessings of paddy rice agriculture; Discussion on the keystones for
thoughtful policy implication
PAWEES 2005 International Conference on Management of Paddy and Water Environment for
Sustainable Rice Production, Kyoto, Japan : 23-32
27. Tassanee Ounvichit, Masayoshi Satoh, Somboon Chantanusart, and Kazumi Yamaoka, 2006
年
Cost sharing and sustainability of Pongsak muang fai irrigation system
Paddy and Water Environment (Journal of the International Society of Paddy and Water
Environment Engineering), Vol.4(No.2) : 81-88
28. 友正達美, 山岡和純, 2006 年
地域の伝統的水利慣行を活かした農民参加による水管理形成の試みーカンボジアの平地水田を事
例としてー
農村計画学会誌, 第 25 巻 1 号 : 28-34
29. Kazumi Yamaoka, Yukinobu Ichida, Kota Asano, Tatsumi Tomosho, Naoki Horikawa, Ren
Yonghuai, 2006 年 a
Social capital and economic rationality in transferring agricultural water to domestic use
during abnormal dry spells, The 3rd Asian Regional Conference of International Commission
on Irrigation and Drainage (ICID) in Kuala Lumpur in Malaysia - Transforming Irrigated
Agriculture into an Efficient Engine of Growth : A-43 (1-15)
30. Kazumi Yamaoka, Yukinobu Ichida, Kota Asano, 2006 年 b
Agricultural water management as a safety net for the domestic water supply during abnormal
dry spells
An Analysis on the Behavioral Science in Water Management, “Innovation and Development of
Urban Agricultural Engineering”
China Waterpower Press (Beijing, China) : 41-57
31. Kazumi Yamaoka, 2006 年 a
Water use efficiency and sustainability in multi-functional paddy rice agriculture
2006 International Symposium on Environmentally Sustainable Management of Agricultural
Water Resources, International Technical Cooperation Center, Rural Development
Administration in Suwon, Korea : 1-19
32. Kazumi Yamaoka, 2006 年 b
Paddy field characteristics in water use: experience in Asia
Agriculture and Water: Sustainability, Markets and Policies
Organization for Economic Co-operation and Development (OECD, Paris, France) : 287-315
33. 山岡和純, 寶馨, 虫明功臣, 2006 年
水問題の諸相と最新の論点, 水循環変動と水問題
地球規模水循環変動研究の最前線と社会への貢献, 内閣府総合科学技術会議地球規模水循環変動研
究イニシャティブ : 9-38
34. 凌祥之, 山岡和純, 2006 年
国際水田・水環境工学会(PAWEES)ー 2 2005 年国際研究集会報告 1 : ー水田の多面的機能ー, 農
業土木学会誌, 第 74 巻 5 号 : 23-24
35. 山岡和純, 2006 年 a

- 水利用を通じた水田ほ場の環境特性：アジアの経験
 (財)日本水土総合研究所「地域用水機能検討調査報告書(農業用水の利用と地域用水機能に係る国際水議論)」：179-202
36. 山岡和純, 2006年b
 OECD農業と水に関するワークショップ：持続性、市場化及び政策の開催
 (財)日本水土総合研究所「海外情報誌ARDEC」, 第34号(March 2006)：p.48
37. Masayoshi Satoh, Kazumi Yamaoka et al., 2007年
 Guidelines for on-farm irrigation development and management in monsoon Asian countries
 The Japanese Institute of Irrigation and Drainage (JIID, Tokyo, Japan)：286p
38. 宮崎毅, 田中忠次, 山岡和純, 2007年
 東京大学大学院寄付講座「共生社会基盤形成を通じた国土の保全管理学」の開設
 農業農村工学会誌「水土の知」：第75巻3号：p.71
39. 山岡和純, 2007年
 ソーシャル・キャピタル概念の農業農村政策への適用に関する一考察
 (財)日本水土総合研究所「平成18年度農村振興整備状況調査委託事業報告書」：587-603
40. 山岡和純, 任永懷, 2007年
 中国の水問題①～⑥「中国の水は足りているのか」「華北平原の深刻な水不足」「2000年続く灌漑地区の新たな挑戦」, 日中友好新聞署名付記事 1月15日号, 2月15日号, 3月15日号, 4月15日号, 5月25日号, 6月15日号, 日本中国友好協会, p.2 (6月15日号のみ p.5)
41. 山岡和純, 2007年
 国際水土フォーラム in 大分基調講演「アジア・モンスーン地域の持続的農業と水環境・水文化の創造」並びにパネルディスカッション「アジア・モンスーン地域の水環境と水文化の持続的発展に向けて」
 大分合同新聞平成19年12月28日号：p.8
42. Yamamoto, Kunihito and Kazumi Yamaoka, 2007年
 Monetary assessment on multi-functional roles of paddy fields in the Asian monsoon region
 Meeting for Working Group 3 of International Network for Water and Ecosystems in Paddy Field, 2 December 2007, Beppu, Oita"
43. Kazumi Yamaoka, Tatsumi Tomosho, Masaru Mizoguchi and Mikiko Sugiura, 2008年
 Social capital accumulation through public policy systems implementing paddy irrigation and rural development projects
 Paddy and Water Environment, 第6巻1号：115-128
44. 杉浦未希子, 山岡和純, 2008年
 地域用水機能増進と環境用水水利権取得の取組をソーシャル・キャピタルの視点から考える
 農業農村工学会「平成19年度関東農政局管内農業用水の利用等による多様な効果に関する検討委託事業報告書」：86-104
45. 山岡和純, 2008年
 農村振興政策におけるソーシャル・キャピタルとガバナンス
 全国土地改良事業団体連合会「2008年3月6日平成19年度農村総合整備事業全国研修会テキスト」：51-64
46. 岡島賢治, 杉浦未希子, 山岡和純, 2009年
 静岡県島田市立六合東小学校での農業用水についての環境教育
 農業農村工学会誌「水土の知」, 第77巻1号：33-35
47. 山岡和純, 鶴田聡, 杉浦未希子, 2009年
 棚田米に対する消費者の関心・評価と情報の役割について
 棚田学会誌, 第10号：39-52
48. Kazumi Yamaoka, 2009年
 Successfully preserving national heritage in Japan
 Low External Input and Sustainable Agriculture, 第25巻1号：28-29
49. 山岡和純, 2009年
 秋田県男鹿半島-「なまはげ」の里の棚田 ニッポンの棚田
 棚田学会事務局(東京都小平市)：32-33
50. Kazumi Yamaoka, David Groenfeldt, Kota Asano and Mikiko Sugiura, 2009年
 Social capital accumulation through building up irrigation water governance in monsoon Asia,
 Social Capital
 NOVA science publications (New York, USA)：189-212